The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代漢語重畳形式認知模式研究
Author(s)	張, 恒悦
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58298
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	張（チョウ）　恒（コウ）　悦（エツ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４７８９　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	現代汉语重叠形式认知模式研究 （現代中国語における重ね型に関する認知的研究）
論文審査委員	（主査） 教　授　杉村　博文 （副査） 准教授　加藤　昌彦　　教　授　古川　　裕 世界言語研究センター特任准教授　劉　　蘭民 世界言語研究センター特任准教授　金　　昌吉

論文内容の要旨

日本語要旨

重ね型（reduplication）は、現代中国語における重要な文法手段の一つとして、これまで盛んに研究され、多くの成果が蓄積されてきた。しかし、先行研究のほとんどが構造主義的言語観に基づいて行われたものであり、重ね型のタイプをめぐって品詞ごとの整理およびその文法的振る舞いについて細かく記述するように努力が重ねられてはきたが、個々の重ね型の意味機能、および形式的に似通った重ね型相互の間における意味的差異についての合理的な解釈を得るまでには至らなかった。近年、認知言語学の立場から重ね型を取り上げる研究が見られるようになり、その代表的なものとして「漢語方言重畳式語義模式的研究」（張敏、『中国語文研究』第1期、2001）が挙げられるが、すべての重ね型のタイプをひとまとめに取り扱い、そこに認知上の共通性を見出すことに主眼が置かれていたため、結果として個々の重ね型の認知的仕組みについての考察がおろそかになってしまった。

本研究は、現代中国語における各種の重ね型に対応する認知モードを明らかにし、それらを理論的、実証的に検討することによって、重ね型という言語現象が現代中国語の文法体系の中で果たす役割について体系的に解明することを目指したものである。

本研究は全6章から成り、以下のように構成されている。

第1章は序論であり、2節に分けて本研究の対象、目標および研究方法について述べている。第1節では、多様な重ね型の中から、本論文で扱った11種類の重ね型を研究対象として選び出した基準と理由を説明した。一般的には「試み（尝试）」や「短時間（短时）」を表す動詞重ね型VVが代表的な重ね型と目されているが、VVは特殊な形成過程に由来し、他の重ね型とは異なる認知的特徴を有しているため、本研究では、考察外とした。第2節では、本研究の到達目標及び研究方法を中心に論を展開した。本研究の主な目的は重ね型の認知的メカニズムの解明にあり、認知言語学的分析手法が本研究の理論的特徴である。

一方、重ね型は現代中国語のみに特有な形態操作ではなく、その源を上古中国語に見出すことができる。また、唐代前後の中古時代において中国語の二音節化が定着するにつれて重ね型は大きく変貌した。この点に鑑み、本研究は共時的な考察にとどまらず、通時的な視点をも取り入れることを試み

ている。さらに、より広い視野に立って中国語の重ね型を考えるため、本研究は必要に応じて日本語や朝鮮語などとの比較対照を行い、さらに南アジア・オセアニア・アフリカの一部の言語を対象とした類型論による研究成果を吸収している。

第2章では、先行研究を概観し、その問題点を分析した。第1節では、先行研究に関する概論として、先秦から今日までの重ね型に関する研究の流れを描き、各時期の研究スタイルと各種の言語理論の影響による研究方法の変化などについて考察した。第2節においては、先行研究の問題点として、次の三点を指摘した。

①重ね型の意味分析に用いた方法が妥当ではなかった。

②個々の重ね型における認知的メカニズムの解明という問題意識が持てなかった。

③品詞の枠を超える横断的研究視点に欠けていた。

第3章では、4種類の数量詞重ね型を取り上げ、それらに対応する認知モードについて考察を加えた。

現代中国語において、数詞“一”と量詞Cからなる重ね型には、一CCと一C一Cの二形式がある。しかし、この両形式の並存は中国語ならではのものであり、必ずしも普遍的な言語現象とは言えない。たとえば、日本語と朝鮮語にも助数詞（量詞に相当する）という品詞があり、且つreduplicationを豊富に持っているにもかかわらず、一C一C（eg. 一個一個[ikkoikko]、한개한개[hangaehangae]）しか存在していない。では、なぜ中国語の数量詞重ね型に二種の形式が採用されているのか、その背後にはどのような認知法則が働いているのか、このような問題意識に基づき、本章第1節において、数量詞重ね型一CCと一C一Cの分析を行った。

Talmy1988によれば、われわれは外部世界の状況を認知する際、二つの視点——巨視的な視点（perspective point with global scope of attention）と微視的な視点（perspective point with local scope of attention）を使い分けている。本研究はこのような理論を根拠として、一CCと一C一Cはまさに上記の二つの視点が中国語に投影されたものであり、それぞれ「統合的認知」「離散的認知」の認知モードに対応していると論じた。また、山梨1995の「空間関係の表現原理」を援用しつつ、一CCと一C一Cにおける形式と意味の対応関係を検討し、両形式はイコン性（iconicity）の表現原理——言語の形式的特徴はその概念構造（conceptual structure）と対応する——に則っていることを明らかにした。

以上の結論を踏まえ、第3章第2節では、量詞の重ね型CCに関する考察を進めた。従来の研究では、CCに対する考察を主語の範囲内に限定する傾向にあり、主語としてのCCとそれ以外のCCを無関係であるように取り扱ってきたが、本研究は一CC・一C一Cとの比較対照に基づき、CCへの統一的な解釈を試みた。CCは離散的認知の特徴を持ち、統合的認知の一CCと対立するが、同じ離散的認知の一C一Cとも認知の速度の点で異なる。相対的にCCの認知スピードが速いことから、本研究はこれを「快速離散的認知」であると認定した。さらに、計数機能と描写機能の有無によって、主語かそれ以外のものかに分化しても、認知のメカニズムに変化がないのを明らかにしたことで、CCへの統一的な解釈を可能にした。

また、数量詞重ね型全体を体系的に把握するために、第3節においては、数詞の重ね型“一一”の認知的仕組みについて考察を行った。“一一”は量詞重ね型“CC”と同じ認知モード——「快速離散的認知」を共有し、シンタックス上“CC”と補完関係にあるため、意味レベルにおいても機能レベルにおいても「離散的認知」を表す“一C一C”と平行していることを明らかにした。こうした認知速度の差による認知的重層性の形成は、先秦時代に出現した“一一”が歴史的変遷を経て現代中国語に生き残る動機づけとなっていると考えられる。

第4章では3節に分け、擬声語からなる重ね型をめぐって議論を展開した。

第1節では、擬声語のAA、ABAB、AABB三形式の比較対照を行った。三形式は文法上の相違点は認められないものの、認知プロセスを異にしている。典型的な「離散的認知」を特徴とするABAB に比べ、AAはより認知スピードが速いことで、「快速離散的認知」のモードに対応する。一方、言語類型論的にユニークな存在であるAABBは、「交錯型離散的認知」を認知モードとし、その構成メンバーが無界の性質を有しているため、構成メンバーがそれぞれ有界のABABとは対照的になる。

第2節では、第1節を踏まえて、擬声語のABB型にまで考察の範囲を広げた。方法論として、中国語の重ね型におけるイコン性に着目し、ABBを重ね型の他の三タイプ（AA、ABAB、AABB）と比較することにより、次の諸点を明らかにした。ABBは、「始動型快速離散的認知」を認知のモードとし、ABAB、AABBより音声に対する認知速度が相対的に速い。また、起点も終点も持たない音声連続のイメージがあるAAに対し、ABBによって喚起される音声連続のイメージは起点を含んでいる。

第3節では、ABAB、AABB、ABBなどのような「基式（base form）」の反復による重ね型ではない、子音および母音の交替による重ね型ABCDを取り上げた。先行研究はABCDの音声面に関する研究にとどまり、その文法的特徴や意味的特徴についての考察をほとんど行ってこなかった。そうした状況に鑑み、本研究では認知的視点からABCDの文法的、意味的特徴に対するアプローチを試みた。その結果、ABCDに対応する認知モードは「連続・不規則型離散的認知」であるという結論を得た。そのような認知モードを形成するにあたり、双声畳韻による内部構造の多層化と音象徴（sound symbolism）のもたらす不規則性が決定的役割を果たしていることを指摘した上で、あわせて第二音節「里(li)」が文法化する動機づけについても検討した。

第5章では、下記の二形式の重ね型に焦点を当て、品詞の枠を超えた横断的な視点からのアプローチを試みた。

第1節では形容詞からなるABB形式を扱ったが、従来の解釈では、形容詞の重ね型であるABBはあくまでも形容詞という品詞の一下位区分であり、その意味的特徴は語幹のAより程度が深くなるところにあると説かれてきた。例えば、『現代漢語詞典』において、「红彤彤」を「とても赤い」（「形容很红」）と解釈している。しかし、こうした解釈は必ずしも言語事実に合致しているわけではない。本研究では、形容詞重ね型ABBが擬声語重ね型ABBから拡張したことに着目し、擬声語重ね型ABBの対応する「始動型快速離散的認知」モードが、形容詞重ね型ABBにもあてはまることを検証した。そうした検証の結果を踏まえ、これまでの形容詞重ね型ABBの品詞分類に異を唱え、中国語の品詞分類に「擬態語」というカテゴリーを導入すべきことを主張している。

第2節では、生産性の高いAABB形式を研究対象とした。機能語以外の品詞、例えば形容詞、名詞、動詞、数詞、量詞、擬声語のいずれもがAABBを構成することができるにもかかわらず、従来の研究は品詞別の考察がほとんどで、異なる品詞からなるAABBがどういう関係にあるのかについて言及していない。本研究ではAABBに関する品詞横断的な研究を試み、AABBという形式をとった以上、基式の品詞性とは関係なく同じ認知モード、即ち「交錯型離散的認知」を共有することになることを明らかにした。これは、本来二分されていた重ね型AABBの一つがAA＋BBからなるという定説とは異なり、ABとABを交錯させることでAABBが形成されるという主張である。

第6章は、結論の部分であり、全体の内容を総括した上、今後の研究の方向について述べている。

中文提要

重叠（reduplication）是现代汉语语法研究的热点之一，至今已积累了丰富的研究成果。然而，大部分先行研究都是采取结构主义语言观，虽然在以基式的词类属性为基准的形式归类和语法描写发面取得了不少的成绩，但对于各种重叠形式的语义功能，以及形式相似的重叠形式之间的语义差异没有给出合理的解释。随着认知语言学的兴起，近年出现了一些从认知语言学角度研究重叠的论著，其代表作有《汉语方言重叠式语义模式的研究》（张敏、《中国語文研究》第1期、2001）等，然而，这些论文的共同特点是把各类重叠形式归在一起讨论，着眼于寻找贯穿在各类重叠式之中的普遍性和共性，结果却忽视了对于一个个重叠形式认知机制的具体观察和分析。

本研究的目的是具体分析各种重叠形式所对应的认知模式，通过理论上的考察以及实证性研究，以求对重叠现象在现代汉语语法体系中所占据的地位和发挥的作用进行全面的探讨。

本研究共计6章，具体构成如下。

第1章为序论，分两节。第1节就本研究选取11种重叠形式作为研究对象的标准和理由进行说明。一般来说，表示“尝试义”“短时态”的动词重叠形式被认为是现代汉语中具有代表性的重叠形式之一，但鉴于该类重叠式由特殊的形成过程而带来的与其它重叠式不同的认知上的特点，本研究暂且将之置于专题研究之外。第2节主要围绕着本研究的研究目标以及研究方法而展开。由于本研究的基本研究目的在于揭示各种重叠形式的认知机制，因此，采取认知语言学式的研究方法为本研究理论上的最大特色。

另一方面，重叠并不是现代汉语所独有的形态操作手段，其源头可以溯及上古。而且，在唐代前后的中古时期，以汉语词汇双音化的成熟为契机，重叠形式发生了巨大变化。由于这个原因，本研究特别注意共时性考察和历时性考察的结合。另外，为了从更广阔的视野下思考汉语的重叠现象，本研究在适当进行与日语及朝鲜语的比较对照的同时，还尽量借鉴和吸收了以南亚、大洋洲、非洲语言为对象的类型学研究成果。

第2章的主要任务是对此前的研究情况进行概述，并分析先行研究中存在的问题。第1节作为概论，首先描述了从先秦到现在的关于重叠研究的历史演变脉络，着重讨论了各个时期的研究风格以及在不同

语言学理论影响下所产生的研究方法上的变化。接着，在第2节指出，先行研究存在以下三个方面的问题：

①对重叠形式的语义分析方法失当

②对具体的重叠形式所对应的认知机制关心不足

③缺少横断性研究视野

第3章以基式为数量词的4种重叠形式为对象，对其各自所对应的语义认知模式进行了系统性考察。

现代汉语中由数词“一”和量词C构成的重叠可以有两种形式：一CC和一C一C。然而，这两种形式的并存并不带有跨语言的普遍性。事实上，日语和朝鲜语中都具有相当于量词的品词——助数词，而且重叠形式十分发达，但两种语言中只有一C一C形式（如：一個一個[ikkoikko]、한개한개[hangaehangae]）并无一CC与之匹配。那么，汉语中为什么会出现两种形式？这背后蕴含着什么认知原则？从这样的疑问出发，本研究在第一节以一CC和一C一C的对比为目的展开讨论。

根据Talmy1988的研究，我们在对外部世界的状况进行观察时，会采取两种不同的视角，即宏观视角（perspective point with global scope of attention）和微观视角（perspective point with local scope of attention）。以上述理论为依据，本研究论证一CC和一C一C为两种认知视角在语言上的投影，二者分别对应“统合型认知”“离散型认知”两种认知模式。另外，通过援引山梨1995提出的“空间关系的表现原理”，本研究对两种重叠式的形式特点与语义特征的对应关系进行了讨论，从而揭示出两种形式所内含的高度的像似性（iconicity）。

在上述分析的基础上，第2节进一步研究了量词重叠式CC的认知模式问题。从前的研究大都倾向于把对CC的考察限定在主语范围之内，认为作主语的CC和主语以外的CC毫无关联。与先行研究不同，本研究通过与一CC、一C一C的对比，试图对CC的语义功能作出统一性解释。CC一方面具有离散型认知的特点，因此与表示“统合型认知”的一CC构成对立，另一方面，与表示典型的“离散型认知”的一C一C相比，在认知速度这一点上又有不同。由于CC所表示的认知模式在认知速度上相对加快，本研究用“快速离散型认知”加以命名。是否具有计数功能和描写功能是决定CC作主语以及主语以外成分的关键，但不管CC出现在哪个位置，其认知模式是相同的，这样就为CC的语义功能的统一解释找到了途径。

另外，为了系统地把握数量词重叠体系，在第3节，我们对数词重叠式“一一”的认知机制进行了分析。通过证明“一一”和“CC”共享相同的认知模式——“快速离散型认知”，本研究揭示了这两种重叠形式在语法功能上的互补关系，以及它们在语义层面和句法层面与典型的“离散型认知”模式相对应的一C一C所存在的平行。本研究认为由认知速度差异而带来的认知结构的重层性是先秦时代既已登场的“一一”能够经历汉语双音化的演变而存续至今的动因。

第4章分3节，对于由拟声词构成的5种重叠式进行了探讨。

第1节比较分析了三种拟声词重叠式：AA、ABAB和AABB。三种形式在语义认知上具有相似性，这是三者句法功能一致的动因。不过，三种形式所对应的语义认知模式是不同的。ABAB为典型的“离散型认知”，相比之下，AA所表达的认知速度要快，属于“快速离散型认知”，而类型学上甚为独特的AABB代表的则是“叠错离散型认知”，这使得其内部结构连续而不可分，有别于内部有分隔和间隔的ABAB。

第2节在第1节的结论之上，将考察的范围扩大到拟声词重叠式ABB。本研究以汉语的重叠形式中广泛存在的像似性为着眼点，通过对比ABB与其它三种形式（ AA、ABAB、AABB ）的差异，使以下诸点得以论证：ABB代表的是“起始型快速离散认知”模式，与ABAB、AABB相比，该模式的认知速度是相对加快的，同时，相对于既无起点也无终点的AA，ABB所唤起的音声意象是具有认知起点的。

第3节所研究的对象是由声韵母的交替构成的拟声词重叠式ABCD。关于ABCD，先行研究的主要兴趣都集中于其声韵的特征分析上，几乎没有涉及其语法特征及语义特征。本研究通过对该形式的认知特征的探讨，认为该形式对应的是“连续・不规则型离散认知”模式，并指出在这一认知模式的形成过程中，由双声叠韵所造成的内部结构的多层次牵连以及由语音象征（sound symbolism）所带来的不规则性起到了决定性的作用。另外，本研究还探讨了第二音节“里(li)”的语法化动因。

第5章主要针对以下两种重叠形式，从跨词类的角度进行了横断性研究。

第1节考察的对象是由形容词基式构成的ABB格式。先行研究一般都把ABB处理为形容词之下的一个分类，并认为其语义特征是对其词干A的程度上的加深。比如《现代汉语词典》就把“红彤彤”解释为“形容很红”。然而，这一解释是不符合语言事实的。本研究认为形容词重叠式ABB和拟声词重叠式ABB之间有扩张关系，并论证了拟声词重叠式ABB所对应的“起始型快速离散认知”模式同样也适合于形容词重叠式ABB的认知解释。以此为基础，本文对汉语中关于形容词ABB的品词分类提出质疑，主张汉语品词分类中应该引入“拟态词”这一范畴。

第2节讨论的是能产性极强的AABB格式。汉语中的各类实词，比如形容词、名词、动词、数词、量词、拟声词都有可能构成AABB，但此前的研究大多是从某一基式的词性出发来划分研究范围。由不同词性的基式所构成的AABB之间究竟存在何种关系？此前的研究从未提及。本研究尝试从跨词类的角度来通盘考察AABB。结果证明，在采用AABB这一形式下，无论基式的词性如何，都共享相同的认知模式——“叠错离散型认知”。这样就否定了从前把AABB结构一分为二，认为其中一种由AA＋BB构成的影响很广的错误性结论。

第6章为结语，在全面总结本研究的主要内容之上，还讨论了今后继续发展的方向。

論文審査の結果の要旨

重畳（reduplication）は中国語において複数の品詞（名詞、動詞、形容詞、副詞、数詞、類別詞、擬声語）のみならず、〈数詞＋類別詞〉のようなフレーズにおいてまで観察されるため、早くから重要な文法形式の一つとして認識され多くの研究が蓄積されてきたが、その一方で、名詞の重畳、動詞の重畳といったように、品詞の枠組みにとらわれて体系性を欠き、研究目的も分布を中心にした文法機能の記述が中心であった。本論文は従来の研究が抱える最も大きな問題点を、各種重畳形式における認知メカニズムを解明するという問題意識をもてなかったことであると捉え、この問題を克服すべく、認知言語学的視点から、中国語の重畳現象に対し品詞・構造横断的な綜合的な記述と解釈を目指した。

本論文の中核は、数詞と類別詞からなる４種の重畳形式（ex.“一一”、CC“条条”、一CC“一条条”、一C一C“一条一条”）、中でも後二者に対する分析である。本論文は、Talmy(1988)を参考に、豊富な用例を検討した結果、“一CC”を「統合的認知global scope of attention」モードに基づく言語形式であり、“一C一C”を「離散的認知local scope of attention」モードに基づく言語形式であると規定した。さらに、“CC”は「快速離散的認知」モードに基づくこと、“一一”は“CC”と同じ認知モードを共有し、シンタックス上は“CC”と補完関係にあることを指摘した（この点は、先秦時代に出現した“一一”が歴史的変遷を経て現在なお生き残っている理由とされる）。

続いて、本論は以上の観察を擬声語の分析に応用し、AA「快速離散的認知」モード、ABAB「離散的認知」モード、AABB「交錯型離散的認知」、ABB は「始動型快速離散的認知」モード、ABCD「連続不規則型離散的認知」モードに分類した。さらに、一般に形容詞の下位類に置かれる ABB 型形容詞と AABB 型形容詞が、それぞれ擬音語と同じく「始動型快速離散的認知」モード、「交錯型離散的認知」モードに基づくことを検証した上で、中国語の品詞分類に「擬態詞」というカテゴリーを導入すべきことを主張している。最後に、構成成分として最も多くの品詞を抱える AABB を検討し、それが品詞の枠を超えて「交錯型離散的認知」を共有することを明らかにし、AABB は AA＋BB からなるという従来の説は妥当ではなく、AB と AB を交錯させることで AABB が形成されるという主張を行っている。

本論文は、擬音語と「擬態詞」の対応になお検討を要する箇所を残すものの、中国語の重畳現象に対し、従来の研究を超えた独創的かつ総合的な記述となっており、今後この分野における必読の文献となることが期待できる。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。